
俺と野球と奇跡 (パワポケ 1 0)

yoriduki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と野球と奇跡 （パワポケ10）

【Nコード】

N9481X

【作者名】

yoriduki

【あらすじ】

親に流されるままに親切高校に入学することになった俺。

中学の時から続けていた野球部に入り、仲間とともに甲子園を目指して

日々練習していた。

だが、その前には中学校の時の「俺にとってのライバル」が立ちはだかる…

稚拙な文章だけど、よかったから見てください！

一日か二日に一話更新しようと思ってますが、そろそろテストが近いし、受験もあるので、更新スピードが遅れるかもしれないのでよろしく願います。

第1話 「一体俺はどうなっていく？」（前書き）

この作品は、ほとんどパワポケ10成分で構成されています。
嫌な人は見ないでください。

第1話 「一体俺はどうなっていく？」

「はぁ、今日の練習も疲れたな……」

「そうでやんすね……」

そういつて、俺と親友の荷田君は最近住み始めた学校の寮へ戻って行った。

そして寮の部屋に着くと、

「おい、お前ら帰るのが遅い！さっさとポテチ買ってこい！」

「え……」

先輩たちがいた。

俺達一年生はいつもこのような先輩の雑務を過ごしながら生活している日々だ。

とりあえずなぜこのような生活をしているか教えておこつ。

2週間ほど前……

「そろそろ俺も高校どこいくか決めないとなあ…」

「なら、この親切高校ってところはどうかしら？」

親切？変な名前だなあと、思いながら、もういちど母に尋ねた。

「それってどんな高校？」

「なんでも野球が強い全寮制の高校らしいわよ」

「俺野球は中学でやめるって言わなかった？」

「あれ、そうだったかしら、まあいいじゃない」

野球、野球か…

少し考え、俺は言った。

「うん、もう一度俺野球をやるよ」

そう、中学の時に、倒せなかったアイツを倒したくて…

「それじゃあ、母さん行ってくるよ」

「いつてらっしゃい」

「この高校バスでしかこれないんだな、しかも片道一時間だし…」

「本当に不便でやんすねえ。バスの本数も少ないでやんすし」

「え？君は？」

「おいら荷田でやんす。中学の時あんたの学校とも戦ったことあるでやんすよ」

「荷田…あ、思い出したぞ、あの時のキャッチャーか。俺は西園寺卓弥だ。よろしく」

「よろしくでやんす。そういえば、西園寺君も野球部に入るんでやんすか？」

「…ああ、もちろん」

そんな話をしてる間に俺たちは学校についた。

「えー、これから校長先生の話だ。よく聞くように！」

「この親切高校では全寮制が（ry

だから、これから君たちは外に出る必要がないのです。なぜなら、ここには

君たちに必要なすべてがそろっているのですから」

ガコン！

え…今の音って何？まさか…門が閉まった音？俺これからやっていけるかなあ…

球児移動中…

「俺が野球部の監督の車坂だ。ここでは親切なんて関係なしにビシバシやっていく。」

そのつもりだからしっかり覚悟しておけ！」

おい、親切はどこいった。責任問題とかいいのか。

そして今。

さっきの寮の部屋で毎日同室の先輩たちにしごかれている。

荷田君がいるから俺一人だけしごかれてるわけじゃないからまだマシだけど…

ちなみに同室の先輩は飯占^{いいじめ}キャプテンと北乃先輩だ。

俺、本当にこれからやっていけるのかなあ…

第1話 「一体俺はどうなっていく？」（後書き）

yoridukiです。初投稿なので、間違った言葉、文脈などがあつたら指摘お願いします。

第2話 「ペラって薄っぺらくて、価値が低い感じするよね」

あれはいつだったか。きっと中3の春だったはず。

公式の大会で上位に入り、次の大会であたった相手がアイツだった。アイツは俺と同じ投手で、4番だった。

俺はアイツからヒットを打てず、逆にホームランを打たれて1 - 0で負けた。

そんな夢を見て俺は起きた。

「西園寺君、早く起きないと遅刻するでやんすよ!」

「え… あ、ああ、もうこんな時間か!」

急いで制服に着替えて寮を出る。なんとか朝のチャイムには、間に合った。

…にしても懐かしい夢を見たな、俺。

そういえば1時間目はなんだったかな…

そう思って時間割を見ると、

「ホームルーム
HR何するんでやんすかね?」

丁度隣から聞かれた。

「いや、なんで俺に聞くんだよ…」

「知ってそうでやんすから」

なんだそれ。

「今から校内で使う紙幣を渡す」

担任の大河内先生はそう言って、ペラとよばれる紙幣を渡してきた。

「先生、この学校でお金は使わないはずじゃ？」

「まあ待て田島、今から説明するから。」

まず、これはこの学校で使うお金だ。購買で使ったり、100ペラ
だせば一日間

だけだが、外に出ることができる。肝心のためる方法としては、ボ
ランテアを

することだ。ボラ（ry）をしたら学校側からペラが支払われる。こ
の200ペラ

はお試し用だな。言っとくが、ペラを取引したりするのは御法度だ
からな、解っ

たな？西園寺」

「なんで俺に言うんですか！」

「お前入試の時点数低かっただろ」

「なら、越後だって」

「あいつも確かに点数が低かったが、今寝てるだろ」

ぐう。

ま、まあ 西園寺 は 200 ペラ を 手に入れた！

「西園寺君は何に使うでやんすか？」

「そうだなあ…」

帰る途中に荷田君が聞いてきた。でもなあ…

「まあ今の所はためておくよ。何があるか解らないからね。」

「それが無難でやんすね」

「じゃ、まあ部屋でも入って話でもしようか」

ガチャ

「おうお前ら！今日ペラ配布されたよな？100ペラよこせ！」

「……」

「あ、どうした？まさかもう使ってたやしねえよな？」

「いや、その…」

しょうがないから北乃先輩に100ペラ渡した。
すると隣の荷田君が話しかけてきた。

「…ホントに使うことになったでやんすね」

「言わないでくれ…」

越後アイツ大変だろうな、先輩三人いたし。

適当に手を合わせておくか。

あー、もうずっとボランティアしといてやろうか。

「そういえば、ここって男子校だと思ってたら森の奥に女子寮があるんでやんすね！」

「普通に平地でつながってるだろ、警備員さんがいるけどな」

「え、そうだったんでやんすか！」

「だからといって行くのはやめとけよ」

「なんででやんすか？」

「あそこには警備犬や警備員さんがいっぱいいるからな。怒られに行くなら止めはしないけどな」

「そ、そうなんでやんすか…」

「ほら分かったら俺のパンツでも洗濯しとけ！」

森か…そのまま壁をよじ登って外にも出れそうだな。

警備に見つからなかったらの話だけど。

第3話 「森の中の巨大女」

「はぁ…疲れた…」

「昨日は部活のテスト、昨日は先輩のマッサージでもつくたくただった。」

「屋上にでも行って休むかな…」

「てくてくと屋上に向かって歩き出す。
そこでふいに足をとめた。」

「音楽室から音？一体誰が…」

「まさか幽霊とも考えたけど、それはないだろうな。
とりあえず少し見てみるか…ん？」

「あれ、田島じゃないか」

「お、西園寺、どうしたんだ？」

「お前こそ何やってんだよ、ピアノなんか弾いて」

「俺今度ピアノのコンクールに出るんだよ。だから練習してんだ」

「そうなのか、がんばれよ」

「おう。今度またよかったら聴いてくれよ」

「ああ」

「そして音楽室を出る。」

「あの暗い顔の田島がピアノ？」

「プッ」

聞こえてたらしく、あとで殴られた。

「うーん、いい風！屋上は気持ちいいな！」

ここからだと学校のいろんな場所が良く見えるな。確かに向こうの方には女子寮があるな。

遠くて女子の姿は確認できないけど。

「それにこの森って相当広いんだな…ん？あそこ今何か動かなかったか？」

少し行ってみよう」

「はあはあっ！屋上からあの場所まで相当遠いな！途中で警備員さんに見つかりそうになったし……！」

犬があそこにいる…！ヤバい、万事休すかって、あれ？

「何かから逃げてないかあれ？」

もう少し近づいてみると、今度はパンツと音がした。

「な、何なんだ？いったい何が…」

さらに近付くと、いきなり木の陰から女の子が出てきた。

「うわっ！」

互いに叫んだ。女の子はともかく俺が叫んだ理由？そんなの簡単だ。相手が185cmあれば誰でもビビるだろう。

「あ、あんたウチの学校の男子…？」

「あ、うん。君は？」

「私もこの生徒。大江 おおえ 和那 かずな っていうんや。よろしくな」

「俺は西園寺。よろしく」

「それはそうと、なんでここにおるんや？ここは生徒禁止の場所やのに…」

「うっ！」

た、確かに…

俺が屋上にいて見たものなんて知らなさそうだけど…いや、もしかしてこの子か？

「俺は…少し用事で」

「用事いー？こんなところにか？まさか女子寮目当て…」

「ち、違うつてば！そういう君はどうなんだ？」

「う、うち？あの…武術やってて」

「武術？あのバンツていつてたやつ？それなら学校でやればいいじゃないか」

「ウチ身体が大きいやろ？だから、身体振りまわすだけでも迷惑やねん」

「柔道とか空手とかつて、そんな身体激しく動かしたか？」

「いや…うちやってるの槍術やから」

「やり？なんでやりなんか…もつと剣道とかにすればいいのに」

「ああ？剣？いいか槍っていうのはな、もともと…」

30分経過

「つていうことなんやぞ、分かったか！」

「わ、分かりました…」

まさかこんなところで槍の話を長々と聞くことになるとは…
犬が来てたらどうしてたん…あれ？

30分もいたのに一向に犬がこないな、どうしたんだ？

「なあ」

「なに？」

「なんでこここんなに犬がこないんだ？」

「警備犬のこと？」

「ああ」

「そ、それは…ふ、普段一緒に遊んでるんやけど…き、今日は来てないみ、みたいやな」

うつわー、急に挙動不審になった。

まさかあいつ、いっつもあの犬を撃退してるのか…

しかもそれを「遊び」と…これから逆らわないでおこう…

「さあ次はあんたの用事やな」

「え？言わないといけないの？」

「当たり前やろ…あ、もしかしてホントに女子寮目当て？」

「だから違うつて！俺は屋上から森を見てて、人影が見えたから来たんだよ」

「人影…まさかオバケ！？」

「いや、ちがうだろ」

「あれ、オバケ信じてへんの？」

「まあな」

「ちなみにそれつてどこらへんで動いたん？」

「ええつと…屋上で見たのがあそこだから…もつとあっちの方かな」

「ええつ本当に！？やっぱりオバケやん！」

「え、君じゃないの？」

「私はずっとここにいたで？」

じゃああれはこの子じゃないのか…まさかオバケじゃないよな？

俺の後ろでオバケが嫌いなのか、頭を抱えながら「うあー」って大江が叫んでいるが。

これは今度また調べる必要があるかな…

「パワポケ君ホントにどこ行ったでやんすか！洗濯ものを一人でやる羽目になったで

やんす…」

「いいからさつさと手を動かせ！」

「わーすいません！でやんす」

荷田君は今日もしごかれている。

第4話 「チームメイトと緑の髪の子」

前にあった森の事がどうしても気になるのでまた屋上に行くことにした。

まあ会えるかどうかは分からないけど…

それにしても、

「因数分解って何なんだよ。なんで勝手に分解するんだよ。自然のままにしておけよ。」

だから数学は嫌いなんだって…ん？」

ガサガサッ

「やっぱり森の方で誰かがいるな。しかも…先生じゃなく女の子っぽいし」

場所を考えると大江ではないことが分かった。

残念ながら今日は部活があるからグラウンドにいかないと行けないんだけど。

「今度こそ尻尾をつかんでやるぞ」

そう思って俺はグラウンドに向かった。

練習の休憩時間に部屋に入るとそこにはチームメイトの官取がいた。

「官取、何してんだそんなところで？」

俺が話しかけると、

「いや、家のコックが持ってきてくれた飴をなめてたんだ」

「家のコック？お前って金持ちだったんだ」

「ああ、うん…まあね。そうだ、君もいるかい？」

「ああ、それじゃあ貰おうかな」

そういつて俺は官取から飴を一粒貰った。

特に普通の飴と変わりはないんだけどなあ…

おいしいのかな？

そう思って食べてみても特に普通に売られている飴と特に差異はなかった。

「ふーん、結構普通の飴と変わりはないんだな」

「そう？これ1粒1万円の飴んだけど…君には合わなかったかな…」

「い、1万円！？そう言われるとなんか急においしく感じられるよ」

うな…」

「ハハハ、調子がいい奴め」

「もし時間があったら今度官取の家に連れてってくれよ」

「まあ考えておくよ」

「おい、監督から集合かったぞ」

チームメイトの越後がやってきた。

「ああ、わかった、いまいくよ」

集合された理由は単なるノックをするためだった。

「おい、西園寺、そっちいったぞー！」

「こんなの取れないって！ああ、奥の茂みの方に行っちゃったよ…」

…先輩のノック強

すぎるんだよなあ……先輩！茂みの方に行ってしまったので取ってきます！」

「さっさと取ってこいよ！」

そういった会話をしてから俺は茂みの方に向かっていった。そうして茂みに入った所で、俺は一人の女の子の声を聞いた。

「いったー…なんで急にボールが」

ボール？もしかして野球のボールか？いや待て、そもそもなぜここに女生徒？

ボールを探すついでに探してみるか。

ガサガサ。

するとそこにはボールを持った、緑色の髪の子がいた。

「あつ、やっぱり女の子だ！なんでここにいるんだよ…それにその手に持つてるのは

野球部のボールじゃないか！」

「あつやばい！見つかったよ！どうしよう…そ、そうだこのボールで！

テヤッ！」

「ちょ、おま、この近距離で全力でボールを投げるなあ！うわああっ！」

「あつ、またまたヤバイです！ボールで気絶させちゃいました！よし、逃げよう！」

あいつ、一体何なんだ…

「西園寺君、遅いでやんすよ！先輩がカンカンに怒ってるでやんす…って

どうしたでやんす、何があつたでやんすか！」

「うーん…」

そのまま俺は保健室に行った。

桧垣先生に診てもらったところ、幸い打ち身程度だったようで、特に何もなかった。

なんでこうなったか聞かれたが、女生徒のことを言ったらややこしくなるから

言わなかった。

「にしても無事でよかったですねえ。」

「あ、はい、桧垣先生」

「そうだ、ちよつと飲んでほしい薬品があるんですが」

「なんですか？危ない薬品とかじゃないですよね…」

「何、単なる精神安定剤ですよ。少し効果を確かめたくて」

「まあいいですけど」

そして先生から渡された薬を飲んだ。

むう、特に何も変化はないけど…

まさかこれで超能力者とかにいきなりなったりしないかな？

「じゃあ俺はこれで失礼します」

ボタン

「彼は違ったようですね…」

保健室で何か聞こえたような気がしたけど、気にしないことにした。それより、あの女は一体何者だったんだろう？今度大江にでも聞い

てみようかな…

第5話 「夏の公式試合」

「いてて…」

先日のボールの痛みがまだ少し残ってる。

「あんな普通近距離でボールを投げるか？それよりあいつはあそこで何をしようとしてたんだ？」

まあ気にしてもしょうがないと思い、荷田君と二人で昼食を取りに食堂へ向かった。

こここの食堂のごはん上手いんだよな。

ただ、あの食堂のおばちゃんたまに無理やり食わせてくるけど。それでもやっぱりうまいもんはうまい。

「お、岩田と田島じゃないか」

「お前らも昼飯か？西園寺と荷田」

「むしろこの時間に食堂に来て他にすることがあるのか？」

「それもそうか」

他にも適当に話をしながら昼食を貰いに行く。

ちなみにここはセルフです。

「あとはお茶と箸をとって…これでよしと」

岩田の横に座る。

ふと、岩田のほうを向いてみると、そこには大量のごはんとおかずがあった。

いやいや待てよ、それ5人前はあるぞ!?

…こいつの腹の中ブラックホールにでもなってるんじゃないか。

「あれ、どうしたんだ? ご飯食わないのか?」

「あ、ああ。今から食べるよ」

一緒に食べてると、岩田が立ったので何かと思って見てみると、お
かわりしにいった。

(まだ食うのかよ!)

心の中で思った。こんな漫画みたいに食うやついるんだな…と。

「俺、すごい量たべるだろ?」

「そんなに食って昼から動けるのか?」

「うん。普段からこんなものだからね。けど、こんなに食っていつ
か身長が5m越したら

どうしよう…」

「ないない、ないからそんなの」

少し戦慄した。

もしそんな奴がいたら野球じゃなくボクサーとかになれよ。
ケンカだったら絶対まけないだろうなあ…

「ホントに? 身長めちゃくちゃでっかくなったりしない?」

「ああ、そんなことないからどんどん食え」

「うん」

遠くから聞いてた田島と荷田は思った。

「なんかアホっぽい会話だな……」

「そうでやんすね……」

「おい、全員集合！今から明日の試合のオーダーを発表する！」

「はい、監督！」

あ、そういえば明日は公式の試合だっけ。

まあどうせ一年生の俺たちは、あったとしてもベンチ入りがいいとこだろうけど。

そうこうしてる間に監督が選手を読み上げた。

「……！今読み上げたメンバーがスタメンだ！今からベンチ入りを

発表する！」

「来た…！入ってくれよ！」

「入ってくれ、でやんす！」

「…番！…！…番！…！」

くっ、なかなかよばれない…

「18番！越後！20番！田島！以上がベンチだ」

「なっ…」

「越後と田島に先を越されたでやんす！？」

「悪いな、西園寺。勉強では負けてても野球では負けないぜ！」

「そうはいつでも俺たちは18番と20番、なかなかでる機会はな
いと思うけどね」

「それでもベンチ入りはやっぱりすごいよ。次は俺たちも入ってや
る！」

「そうでやんす！」

もっと練習しなくちゃな…！

翌日。

「地方大会一回戦」

「俺たちはベンチに入っていないけど、一生懸命観客席で応援するぞ！」

「やんす！」

カキーン！カキーン！カキーン！

へえ、先輩達けっこうやるなあ…

「先輩達けっこうやるでやんすね！」

「え、あ、うん。そうだな」

俺の心の中でも覗いたのか？

そうこうしてる間に決着はついた。勿論こっちの圧勝だ。

「へえ、高校になったら地元の新聞記者もくるんだな」

「美人の女性に質問されてるでやんす！先輩たち羨ましいでやんす！」

「そこかよ」

取材が終わった先輩たちがこっちへ来た。

「ようお前ら」

「あ、キャプテン」

「しつかり俺たちのプレーを見ていたか？」

「もちろんです！」

（言わないと殴られるしな…）

「そうか。だけど応援が小さかったな。学校へ戻ったら即反省会だな」

スタスタ…

「…最悪でやんすね」

「…うん」

さらにその翌日。

俺の高校の野球人生はここから始まったのかも知れない。

く地方大会二回戦く

「よし！今日戦う相手は分かってるな？キャプテン」

「ウス、監督！」

「今日の相手はあの星英高校だ。去年にとんでもない投手が入部したが、

スピードが早いだけで、変化球は対して曲がらない。ビビらずバットを短く持って

行け！」

「ウス！」

観客席にて。

「おい、あれ天道じゃないか!？」

「ホントか!？官取!」

「ああ、西園寺。あれは天道だよ」

「地元にこんな奴がいたなんて…最悪でやんす」

「確かに…あんな奴がいたら俺たち甲子園に行けないかもな」

「うん…」

「何言ってるんだ、荷田、官取、岩田!」

「な、なんでやんすか!？」

「あいつは俺たちが三年間戦ってく相手だろ?弱気になってどうする!」

「そつだよなあ…うん、西園寺の言う通りだ」

(天道…中学では負けたが、高校ではお前を倒して見せる!)

「よし、打つぞ…相手はただの一年だ、ビビることはない」

「あ、飯占キャプテンが打つでやんすよ!」

「がんばれキャプテン!」

ビュッ！
ズバーン！

「な、なんて早さだ、152km！？こんなの打てるわけねえ…」

結果 親切0 - 2星英

星英ベンチにて

「おい、天道。お前5本もヒット打たれてるじゃないか」
「すみません監督」

「これからは頼むぞ。この学校のエースを背負ってくんだからな！」
「はい！」

「おい…お前ら。今日の試合。あれは一体何なんだ？」

「……………」

「おい、西園寺。お前から野球を抜いたら何が残る？…答えろ！」

「え、ええと…ごみであります！」

「よし、よくわかってるじゃねえか！なら、1、2年はグラウンド50周してこい！」

「はい！」

「3年はこれで引退だ。あとで締め言葉を頼む」

「はい」

「これで、飯占キャプテンともおさらばでやんすね」

「ああ、そうだな」

毎日殴られてたからなあ…やっと解放されると思うと涙がでてくるよ…

さて、次のキャプテンは誰になるのかね？

第6話 「真キャプテンは…」

「全員集合！」

監督の指示のもと、練習をしてた部員が一斉に集まる。

今日はあの負けた試合の日の後だ。

ついに次期キャプテンとか決まったのかな？

まさかいきなり俺とかじゃないよな？

「…西園寺君、それはないでやんすよ」

「か、顔に出てた！？」

「むしろ聞いて下さいって言うてるくらいの顔だったでやんす」

そ、そうか。俺ってそんなに顔に出やすいタイプだったのか。

「あ、監督の話が始まるぞ！」

「…話を逸らしたでやんすね」

うるせい。

「二年生はこれから甲子園を目指して頑張れ。俺たちは引退するが応援してるからな。」

一年はあの天道と三年間戦うことになる。苦しいだろうが負けるな。短い間だったが、いままで楽しかったぞ」

飯占元キャプテンが引退の言葉を告げた。
…中々いいことをいうなあ。

そして、それに次期キャプテンの基宗が答えた。

「はい！先輩の意思をしつかりと継ぎ、頑張ります！」
「よし、いい返事だ。…後は任せたぞ」

そういつて三年生は引退していった。

「よし、それじゃあ各自練習に戻れ！」
「ウス！」

各自練習に戻る。
それじゃ俺も練習に…ってん？

「どうしたんですか？基宗キャプテン？」
「いや、何。さっき監督にな、『キャプテンになったなら、新人の育成もやれ』と
言われてな。まずお前から育成もしようと思ってな」
「はあ…」

一体なんで俺なんだ？もしかして見込みがあるのか！？

…んな訳ないな。単に目についたからなんだろう。

「よし、じゃ始めるとするか」

「え、今からですか!？」

「ああ」

今から何するつもりだよ…監督に言われたのさっきじゃなかったのか？

キャプテンどんどん用具持ってきてるし…

あの人前からやりたくてウズウズしてたんだろうなあ。

うん、そうにちがいない。

きつとゲームにしたらマッドサインティストになるだろうな。

「どうした？始めるぞ」

「あ、はい」

「今からバットとグローブを渡す。俺がボールを投げるから赤い玉だったら打て。」

白い球なら捕るんだ」

「わかりました」

さて、と…あれは……白！

打つ

捕る

「おい、白の時はとるんだ!」

「す、すいません！」

さあ、気を取り直して……赤！

打つ
捕る

「おい、赤の時は打つんだ！」

「す、すいません！」

その後も何回か続いた。

「結果は……三十球中十八球！まだまだ練習をする必要があるな」

「今度は別のメニューをするんですか？」

「ああ、そうだな」

「後……ひとつ質問していいですか？」

「なんだ？」

「これ……役に立つんですか？試合中にバットとグローブ同時に持つこと無いですし……」

「……」

沈黙が続く。

まさか…この人なんにも考えてなかったのか！？

「西園寺」

「は、はい？」

「それを決めるのは俺じゃない。いつかはこれがきつと役に立つ日が来るだろう。」

だから今日の感覚を忘れるんじゃないぞ」

「は、はあ…」

「それじゃあな」

スタスタ…

本当になんにも考えてなかったようだ。

しょうがない、俺もそろそろ寮に戻ろっかな…ん？あれは？

ブンッ！ブンッ！

「ん？どうした？西園寺。俺の素振りなんか見て楽しいのか？」

「いや、そういう訳じゃないけど。もうそろそろ練習の時間終わいだぞ、越後」

「俺はもう少し練習するぜ。早く上手になりたいからな。どうだ？一緒にやらないか？」

「うーん…」

正直疲れてるけど…こっぴつところで頑張ってるからこいつは野球うまいのかな。

「俺もやらせてもらっつよ。早く上手になりたいからな。」
「やれやれだぜ」

「なんで俺今やれやれって言われたんだ？」

「まあ、いいからやろうぜ」

なんなんだか…

今、俺はマウンドに立っている。

俺は球を投げる。越後がバットを振る。そのバットは球の少し下を
行き、空を振った。

なぜこういうことになってるかという、始まりは越後のこの言葉
だった。

「俺と一打席勝負しないか？」

この言葉に俺はYESと答え、コイツと勝負することになった。
俺は二球目を投げる。球は大きく外にいった。

（やっぱりこれくらいじゃ振ってくれないか…）

俺の持ち球は140km前半のストレートとスライダー、決め球のカーブだ。

正直に言つと、中学の時に他の学校から推薦が来ていて、投球には自信がある。

推薦蹴つて、この親切学校にはいったんだけど。

1ストライク1ボール…

俺は三球目を投げる。今までのストレートとは違い、少しスピードを緩めたカーブだ。

「くっ…」

越後はタイミングがずれたようで、またもバットは空を振った。

「さすがだな、西園寺！けど！勝つのは俺だ！」

四球目、五球目と投げる、が全てストライクゾーンには入らなかった。

2ストライク3ボール…！

「これでラストだな…越後！」

投げる。もちろん、ど真ん中直球だ。越後はそれを捉えた。

が、当たり所が悪かったようだ。

打った球は真上に飛んで、落ちてきた。

「キャッチャーフライ（捕飛）だな。この勝負はお前の勝ちか…やれやれだぜ。俺ももっと練習しなくちな」

「勝ったからボテチくらいは奢ってくれよ？」

「う…やれやれだぜ」

購買に行ったらポテチが売り切れてた。

越後が代わりに買ってきたお菓子は非常に辛いお菓子だった。

あいつは目をつぶって買ってたから選んで買ったわけじゃ無いんだが…

俺が辛いのが苦手と知っていたのか？嫌がらせだろこれ…

あのお菓子は岩田にあげた。そしたらいきなり一気食いました。すげえ。

第7話 「緑の髪の女の子」トラブルメーカー？」

今、俺は屋上に向かって歩いている。

あそこは人が来ないし、風も気持ちいいし、休むのにうってつけなんだよなあ。

今日は基宗さんがキャプテンになってから数日後だ。

「はあ…疲れた…ん？前も言ってなかったか？」

そして、ここに来てまずやることは一つ。あの人影いたりしないかな…と見ることだ。

「いたよ！」

あの森の人影は緑色の髪の女子だったのか…
ん、どんだん森の奥に進んでいくな。今日は練習休みだし…ついていってみるか。

「では、いつてきますよ」

ガチャガチャ、ボタン

ふうん。この森の奥に旧校舎があったのか。

アイツはこの旧校舎の裏にある扉を通して出て行っちゃったけど…

「たぶんこれ、外につながってるだろうなあ…確かめてみるか」

扉のドアノブに手をかけて、回す。

あ、あれ？回らないぞ？

「これ、カギかかっている！？」

え、じゃあアイツどうやってここ通ったんだ？

まさか、この学校の理事長の娘で、このカギを持っていたとか…

いや、それだったら正門からでるか。

「どうしようか…」

けどまあ、アイツも長くても3時間くらいで帰ってくるよな。

個人的にはボールの恨みもあるから、この扉を開かないようにして封印して

やりたいけど…

それじゃこの扉をどうやって開けたとか聞けないし、何だか面白そうだ。

「ふいゝ、疲れたよゝ。今回はちょっと遠出だったから、帰ってくるのにもひと苦労ですよ。けど今回は大量に買ってきました！これならしばらく町にいかなくてもいいでしょう！」

「おい……」

「え、え、誰！？」

「いったい何時間待ったと思ってる！もう夕方だぞ。帰ってくるのが遅いんじゃないか？」

「……」

「にしても、このドアの鍵をお前なんで持ってるんだ？そこらへん……ん？」

「これとこの荷物を持って、そこに立って」

「こ、こっか？」

カシャリ

カメラで撮られた。

「え？」

「はい、証拠写真。これであなとも共犯者ですよ」

ちよ、おま！？しかもドアの位置がいつの間にか俺の後ろに！？

「私の写真は無いのでむしろ首謀者として扱われるかも」

「ひ、ひでえ」

「では、手に持ったものを返してちょ」

「は、はい」

「私は高^{たかしな}科 奈^{なあ}桜。皆からはナオって呼ばれてます。あなたは？」

「西園寺…」

「西園寺君ですね、覚えましたよ！よろしくね！」

「あ、ああ」

「じゃあ、失礼しまっす！」

スタスタ…

も、もしかして俺はとんでもないやつと知り合いになってしまった
んではないのか？

よろしくって、何なんだ？何をだ？

……………

「もついい、帰ろっ…」

「はあ……」

「どうしたんでやんすか？」

「いや、少し前になんかともんでもないやつと知り合いになってしまったんだ」

「それって誰でやんす？越後でやんすか？」

「いや、越後もともんでもないけど、越後じゃないよ」

「ま、いいかでやんす。それじゃあ先にグラウンドに行ってるでやんすよ」

「ああ」

ホントにあいつはなんだ？ 今度また問いたださなくちゃならないな。

会えただけど。

「西園寺、先に行ってるぜ！」

「ああ、越後」

「西園寺、先に行つとくぞ！」

「ああ、田島」

なんでみんな俺に声をかけるんだ？

「西園寺君！ 先に行つてますよ！」

「分かった、つてちよつと待て！」

ガシッ

「アウツ！」

「高科、なんでお前がここにいるんだ？」

「ここは廊下ですよ。生徒がいても問題はありませんです」

「いや、問題だらけだからな。女子生徒がここにいるのはおかしいからな」

「いや、堂々としてればバレないもんだねえ」

なんでこいつバレないんだ？

「それはそうと、なんでここにいるんだ？」

「男子校舎の中は女子生徒も興味津津ですからね。そんな彼女達に真実を提供するため、

正々堂々こつそり忍びこんでるわけですよ」

「正々堂々と、こつそりつて言葉は普通同時に使わないからな」

「それで、西園寺君は私の味方ですか？それとも敵ですか？

いや、敵にきまつてるだろ。

「俺がトラブルメーカーの味方をしたところで何か俺に得があるのか？」

「むむっ敵なんだ！ならばここはあなたにも共犯になってもらう必要があります！」

はっ？

ガシッ！

「おい、俺は練習があるんだ！離せ！」

「いえいえ、こんな面白い事は他人と共有しなくてはいいけませんから」

「お前は何をいつているんだ！？」

スタタタタタ…

やばい、練習に遅れてしまう…あ、あれは大河内先生！

「おい、お前ら廊下を走る…女子生徒？そこの二人止まれ！」

スタタタタタ…

「そんなこと言われて止まる西園寺ではないのですよ！」

「俺の名前を出すな！」

「なに、西園寺だと！」

「違います、先生誤解です！」

本気でやばいと思いながら高科を見ると…ワックスを持っていた。

「ワックスアタック！」

「うわ、こいつワックスぶちまけやがった！」

「ぐわっ！」

ツルッ！

「せ、先生えー！」

「あははははははは！」

「笑ってる場合じゃない！俺を巻き添えにするな！」

「あははははははは！次行ってみよー！」

「行くなあー！」

もちろんこの後怒られました。なぜか俺だけ。高科は逃げ切った。
くそ…あいつめ…今度会ったら覚えてろよ！

第8話 「どうも場所がころころ変わるから題名付けにくい」

「おい、西園寺」

「はい、何ですか監督？」

「少し他の学校に行って偵察にいつてくれ」

「はい、分かりました。」

ということで、俺は今、荷田君と他の学校の偵察に行っている。もちろん偵察というのは、相手の野球部のエースとかの弱点を探ったりすることだ。

「ホントにバスで片道1時間は長いでやんすね」

「ここって交通は不便だよな」

どうでもいい話をしながら他の学校を見学しに行く。にしても久しぶりに外に出て見たら全く知らない製品とかニュースが流れてる。

…たったの数カ月で町って変わるんだなあ。

「おお、これは最新版のアニメのフィギュアでやんす！早速買っでやんす！」

「…」

荷田君は楽しそうだ。

近くの栽培高校や、タクシー高校などの情報を分析する。

けっこめんどくさいな。

にしてもタクシー高校か。レーシングの授業とかあるみたいだけど、なんか楽しそうだな。

「おいらもやってみたいでやんす！」

どうやらやっぱり俺は考えてることが顔に出やすいようだ。
…いや、むしろあっちの洞察眼がおかしいのか？

「とりあえず一通りの学校の偵察終わったな」

「おいら、少し買いたいものがあるから少し寄っていいでやんすか？」

「だめだよ、一本バスに乗るのが遅れたら次のバスまで時間かかるから」

「仕方ないでやんすね…ん？奥から来るのは…天道じゃないでやんすか？」

確かに天道だ。しかも彼女を連れている。なんともムカツクやつだ。

「…よう」

「うん？誰、君たち？」

「…お前の敵だ。前戦った親切高校の生徒だよ」

「覚えてないなあ。最近結構試合したし」

「俺は試合に出てなかったからな。俺は西園寺 卓弥だ、覚えておけ！」

「そんなライバル宣言されても。俺そういう事何回もされてるからいちいち覚えられないんだよ。」

「ねえ、天道君。もういきましょ？」

「ああ、そうだな若菜。それじゃまたいつか、新月高校の人！」

スタスタ…

「…新月高校じゃなくて親切高校でやんす。隣にいたのは彼女でやんすよね？羨ましいでやんす…」

「あいつ、甲子園に出るのにデートとはいいい御身分だな」

「ホントでやんす！」

そうして、俺達はまた歩き出す。

まあ、そうしてバスに乗ったんだけど…

「なんでお前がここにいるんだよ！」
「まあまあ、いいじゃないですか。ナオっちも少し外に出てたんですよ」

高科の奴と一緒に乗ってやがった。

「そういえば、お前ってなんであそこの鍵を持ってるんだ？」
「あそこってあの旧校舎の扉のことですか？」
「うん。やっぱりあそこ旧校舎だったのか…」
「まあ旧校舎のことはまた次回話すとしてですね、あの扉はナオっちが偶然見つけた物なんです。」
「偶然？」

こ、こいつ偶然であんな扉を見つけたのか。なんとも運がいい奴…あれ？それでもあの鍵のことは説明がつかないぞ？

「うん。あの扉は偶然見つけたんですよ。扉の鍵が腐ってて普通に通れたので、
ナオっちが新しく鍵をつけなおしました。」

「つけないおした？」

「そうです。自作ですよ？『工作が上手いんだな、ナオ』って言うてくれてもいいですよ」

「言つつもりはないが、つまりあの扉は高科専用ってことなんだな？」

「相棒が使いたいたっていうなら貸してあげてもいいですよ」
「誰が相棒だ…」

勝手にこんなトラブルメーカーの相棒にされてたまるか。

「まあ確かに使ったら退部にされそうですね！」

「なぜ喜びながら言う？そういえばお前は何部なんだ？」

「私ですか？私は新聞部です」

新聞？ここって運動部じゃないといけないはずじゃ…
そのことを指摘すると、

「そんなことはどうにだってなるんですよ！」

堂々と言われた。

まあ、そつこつ言ってるうちについたので、高科と別れた。

数日後。

「夏の甲子園一回戦、星英高校勝ちました！」

テレビです。

「ちつ、やっぱあいつ強えな」

「そりやそうでやんす。あつちは超高校生球のピッチャーでやんすからね」

官取と荷田が話す。

あいつ…そのまま甲子園優勝とかしないよな？

「そついえば高科、お前天道相手にライバル宣言したんだろ？」

「え、田島、誰からそれを？」

「おいらでやんす！」

荷田君……口軽いな。

「当たり前だろ！あつちが超高校生だからと言って、相手は同じ人間なんだ。戦う前から」

ビビってどうする!」

「…すげえなお前。けど、お前の言うことはもっともだ。よし、俺も今日から

天道のライバルだ!」

「俺も俺も!」

「田島に越後…」

(なんか俺が天道に認められたライバルってことになってるけど…まあいいか)

部屋にて。

「ハア」

「どうしたの、荷田君?」

「いや、一回外に出るといろいろと買いたいものが増えるでやんす」
「例えば?」

「この本を見てくれでやんす」

そういつて本を見せられた。

「あ、これは知ってるぞ！ガンダーロボだろ？あれ、けど、なんか少しちがくないか？」

「これはガンダーロボはガンダーロボでやんすけど、ダイナミックガンダーロボなんで

やんす！」

「だ、だいなみつくガンダーロボ？」

「そうでやんす！普通のガンダーロボと違ってまず~~~~」

「わ、分かったから！ほ、他には？他には欲しいものないの？」

「うーん、後欲しいものでやんすか…あ、ウダマニユラでやんす！」

「ウダマニユラ？」

なんだそれ。それは始めて聞いたぞ？

「ウダマニユラっていうのは、~~~~~」

「も、もう分かった、分かったから勘弁してくれ！」

「なんだ、もういいんでやんすか？こっからが楽しいところなのに

…」

「お、俺は別に楽しくないんだが…」

「そうでやんすか？まあもうちょっとくらい話につきあってくれ、でやんす」

「へ！？」

ダレカタステクレー！！！！

第9話 「大江と神条」

特にやることがないから森をうろついてみることにした。

ホントはここで自主練習とかやるべきなんだろうけど、なんかやる気になれないしなあ。

「うん、空気がおいしい」

学校の中といえ、ここは森。

空気がおいしいことに変わりはない。

最近は高科のやつに振りまわされていたからな。

「…あいつ狙ってやってるんじゃないか？」

気のせいだろうとは思っけど数が数。

バスの中で会えば、男子校舎の中でも会う。

あれ以外にもなぜかあいつは野球部の部室で会ったりした。

しかも今の所100%の確率で最後に大河内先生が来ることになる。

「トラブルメーカーが自分でトラブルを引き寄せてどうするんだか」

そういえばここら辺って大江のいた場所の近くだったな。

ちょっと寄ってみてもいいかな…いるかどうか分からないけど。

テクテク…

「？」

おかしい、急に警備犬がなくなつたぞ？

「キャウン、キャウン！」

！

犬の鳴き声だ！

何事かと思い、鳴き声のした所に向かうと、

「おまえ新入りやろ？まだウチに向かつてくるのは100年早いわ！」

犬の足を持っている大江と、足を持たれて空中で宙ぶらりんになっている犬がいた。

そして大江と目があった。

「……」

「……」

「キャウン！」

どうしよう。

ものすごく気まずい。こんな時どうすればいいんだ？

親や学校からこんな時どうしろと習わなかったぞ。

おい、学校。これからちゃんとこつという時の対応法を教えろ。

「や、やあ大江。ご機嫌麗しゅう…」

「あ、あはは…」

「キャウン！」

「と、とりあえずその犬を、離したら、どう、ですか？」

なんか敬語になってしまった。

「あ、う、うん」

パッ

急いで犬が逃げる。さすがにあれは警備犬も逃げるな…

「お前、普段からこんなことしてるのか？」

「いや、そういうわけじゃないんやけど…」

「ふーん…」

「そ、それはそうと、今日はここに何しに来たん？まさかウチに会いに来てくれたん？」

「まあそういうことにしておくよ」

「あはは、嘘でもいつてくれるとうれしいなあ。けど、そんなこと言ったら彼女悲しむで？」

「俺彼女いないんだけど」

いたら他の人に自慢してるし。

「えーっ、いないん？なんだ、いると思ったわ」

「どこをどうみてそう思ったんだ？」

「いや、なんとなくやけど…なんかいそうやったから」

彼女いない歴〃年齢ツス。

「で、ここにきてくれたのはいいけど、なにもすることないで？」

「いや、単に空気とか吸いに來ただけだから」

「あ、そうなん？まあ確かに空気はおいしいけど…警備員さんとか見つかるリスクとか

考えてないん？」

「そいう訳じゃないんだけどな」

まあ確かにここにくるまでに何回も見つかりかけたけど。

「それに、ウチ、実はな。いつもここに来てることばれてて、たまに自治会がやってくるねん」

「自治会？」

「あれ、あんた知らんのか？」

「教室にいるときはほとんど寝てて聞いてないんだ」

「まあ、簡単にいうと、風紀の取り締まりっちゅーことやな」

そんなのがいたのか。

「そいつらは普段白い制服着てるから…分かった？」

ああ、あいつらか。あのいちいちいろんなことに注意してくる奴ら

か。

あいつらうざくて一回けりたくなっただけど…そういうことか。
ん？あれも自治会の奴らかな？

「なあ、大江？」

「ん、なんや？」

「あれ自治会じゃないのか？」

「ん…！あれ紫杏やないか！あんた、あっちで隠れとき！」

「お、おう」

急いで隠れる。紫杏？いったいどんなやつなんだ？

スタスタ…

「や、やあ紫杏」

「またいるのかカズ。あんまりここに来るなといってるだろう」

あいつカズって呼ばれているんだな。

「でも校舎で身体振りまわしたら怒られるし…」

「それは絶対やらないといけないのか？」

「いや、そうじゃないんやけどさ…」

「まあいい。それよりさつき男子生徒がここにまぎれていなかったか？」

「い、いや、気のせいちゃうん？」

「そうか、それならいいんだ。それじゃあ私はもういくぞ。あと、
その男子生徒。」

お前もあんまりここに来るんじゃない。たまたま見逃してるが、次
はないぞ」

バレてんのかい。

「紫杏行つたからもう出てきてもいいと思うで？」

「…見つかったたからあんまし意味無いと思うけどな」

「けど顔はハッキリと見られてないから、まだいいんじゃない？」

そ、そういうものか？ハッキリ見られなかったらセーフって…

「とりあえずあの紫杏ってやつは何者なんだ？」

「紫杏のこと？アイツは生徒会のトップやつとるんや。男女で校舎が別れてるから、

女子の生徒会トップってことになるな。ウチらと同じ一年や。あ、
そういえばアンタに

まだ私のこと一年って言っただけ？」

そっぴいば言っただけだ。雰囲気だいたい分かったけど。

この身長を生かしてバスケットかバレーすればいいのに。

いや、すだにもう勧誘されて入ってるか？

「それで、本名は神奈^{しんじょう} 紫杏^{しあん}。私の数少ない友達や」

「お前あんな堅物そっぴいのが友達なのか。見た目でいっただけアイツの方が友達少なさそ

うな気がするけどな！」

「それ、私の前で言うか？実はうち、そんな長い方じゃないね

んで？」

「す、すまん」

こええ、こええよ。武術やってて185cm、そんな奴の脅しは怖すぎる。

「まあええけどな。紫杏が生徒会に入った時、作業をするときに力仕事をする人がいないのに気づいたらしいんや。それまでは先生がやっててくれたらしいんやけど、それじゃダメだと紫杏が言ったらしくて、私が手伝うことになったんや」

「その時に仲良くなった、って事だな」

「いや、その前から森で知り合ってたはいた」

「で、生徒会の関係で仲良くなった、と」

「そういうこと」

森での出会いから発達した友情：なんだそりや。

「あと、お前ってそんなに友達少ないの？こうして話してる分にはそんな友達が少ないように思えないんだが」

「いやあ、この身長といつもはっちゃけてるせいかな、あんまり女子とは仲良うなくて。」

でも、男子とはホントは話すの苦手なんや」

そうなのか？こうして話していると普通に見えるんだが…

実はホントの一番の友達は警備犬…ゲフンゲフン、こんなこと考えてるのがバレたら

大変なことになりそうだからやめておこう。

「で、なんで男子が苦手なんだ？」

「え…それ言わなくちゃあかん？」

「いや、別に言いたくなかったらいいんだけどな。ただの好奇心だよ」

「好奇心は猫を殺すって言葉、知らんの？」

「そこで使う言葉なのか、それ！？」

え、なに、俺殺されるの？ ゆっくりしんでいってね、ってことなの！？ 俺！？

「まあそれは冗談としてな」

「冗談にしてはタチが悪いぞ…」

「ならアメリカンジョーク」

「言葉を換えても意味が変わらなかつたら一緒だろ！」

「まあええからええから。実はウチ、昔武装した高校生数人に襲われたことがあるんや。」

生意気だからって。それで大怪我して、一年間入院。これでも、あんたより一年上なんやで？」

「そ、そんなことがあったのか…」

きつと中学生で女不良集団のトップとかだったんだろうな。うん、そうにちがいない。

「あ、いつとくけどウチが小6の頃の話やからな？」

「…」

ちよ、ちよっとこいつに対する考え方を改めないといけないようだ。そんなに怖いやつだったのか。まあ…普通に話してる時はただの面

白いやつなんだけど。

「あ、それじゃあウチ桧垣先生に呼ばれてたから行くわ」

「え、桧垣先生って男子の方の先生なのか？」

「さすがに先生は男女共通やから…」

「そうだったのか…」

「それじゃあ、ウチもついてくわ」

「ああ」

桧垣先生ねえ…ん？なんで怪我もしてない大江が呼ばれるんだ？
やっぱり超能力者…そんなことはないな。

第10話 「記者」

今日も森にやってきた。

昨日、大江と別れるときに「明日はウチここにおらんで」と、言っていたので、

俺が森をうろつく理由は別にある。

それじゃあなんで俺が森をうろついているのか。

もちろん女子寮…ではなく、外に出るためだ。中じゃ暇なので。

テクテク…

獣道を歩く。しばらく歩くと、壁が見えた。

「うわ、やっぱり高いか…」

壁にたどりついた俺は、その壁を見上げた。

うん、やっぱり高いな。3mは軽くあるかな？

…え？なんで高科の作った扉を使わないか、だって？

や、なんか女子が作った物を使ったら男子として負けかなと。

やっぱり自分の力でやらなくちゃね。

で、まあ本題に戻るけど、ロープとかいろいろ持ってきたから、なんとか登れそうだけど…

ああ、なんとかいけそうだ。

……

「おお、外に出れたぞ！」

まあ実際こんなことしなくても偵察とかで外出はできるけど。
今回は完璧フリーだからな。

おっと、大声を出したらせつかく出れたのに警備員さんに見つかってしまふな。

一応、周りを見て……

「……………」

「……………」

やばい。外国人っぽい方にめちゃくちや見られてる。

俺英語の成績1なんだけど。ちなみに学年最下位から2番目。最下位は越後。

「……もしもし、アナタ、この学校の生徒ですか？」

「あ、はい……」

よかった、日本語喋れるんだ。しかも発音も上手いし。

「Wow！これはラッキーです。私、フリーの記者で、竹内ミナ、います。」

この学校を調べたくて、ここに来たんですが……入らせてくれなくて困ってたんです。

……協力してくれますか？」

こゝ、こういう時協力しなかったらマズくなるような…
けど、こういうときって法律的に大丈夫なのか？

「車で町まで送ってあげますよ？」

「よろこんで」

移動手段は必要だもんね。

え、法律？なにそれ、おいしいの？

「それじゃあこの車に乗って下さい」

「はい」

「とりあえず、名前を聞かせてくれますか？」

「名前？まさか直接本に載せたりしませんよね？」

「まさか。呼ぶ時にアナタ、じゃ困るからですよ」

「別に俺はそれでいいですが…それに、もしミーナさんが悪い人だ
つたら」

「私、悪い人にみえますか？」

いや、全く見えないけど。むしろ天然って感じがするな。いや、猫を被ってるだけとか？

「まあ、いいか。俺は西園寺 卓弥。親切高校一年です」

「それじゃあ一つだけ質問します。…あ、簡単な質問ですよ？」

「え、一つ？」

「ハイ」

一体この人は何しに来たんだ？…たったのひとつで意味あるのかな？それに俺が答えられるかどうか分からないのに。

「この学校をどう思いますか？」

ずいぶんとアバウトだな。

「ずいぶんとアバウトですね」

おっと、声に出してしまった。

「なら、もう少し具体的に。この学校での生活は楽しいですか？もし、困ってることが

あったら聞かせて下さい」

田島の暗い顔や、越後のあた…ゲフンゲフン、うん、学校のことだつたな。

「特には無いですけど…」

「本当にですか？」

な、なんかこう、本当に？って言われたら怖いな。

「い、いや…あ、そうだ！交通の便が悪いのと、情報が外から中々入ってこないことが
ちよつと」

「それだけですか？」

ま、まだ！？

「ま、まあこれくらいです」

「そうですか、ご協力感謝します」

「そ、それだけでいいんですか？」

「ハイ」

なんだ、もっと学校の細かいところまで聞かれると思ったんだけど。

「そういえば、なんでこの親切高校のことを取材してるんですか？」

「取材、とは違うんですけれど、実は事件がありまして」

「じ、事件！？」

そんなのあったっけ？

もしあったら、俺ら知らされてるんじゃないのか？

「まあ、時間が少ないので細かいことは言えませんが…この学校、
おかしい、思いま
せんか？」

「え、どこが？」

特に不自由はないんだが。あ、男子寮と女子寮が別々になると

ことか？

「気づきませんか…さっき、情報量が少ない、言っていましたよね？」

「あ、はい」

「実は情報が外に来るのも少ないんです。確かに、学校のホームページや、政府に送っている情報は正しいんですが…必要最低限のものしか送ってないんです」

そ、それって…どういうことだ？

分数のかけ算が理解できない俺にとって、これは理解しにくいぞ。

「だから私が一部調べたんですが、この学校、内部におかしい空間があるんですよ。」

しかも、普通は行けないような所に。」

「……」

「しかもこの学校、町と遠いせいであまり政府は関与せず、ヘリや船までこれるよう

海岸も近くにあったりする。最近はおオガミとジャジメントという会社が戦争とか

しています、この学校はそれに関与してる可能性があるんです」

えつと…どういうことだ？

「そののせいかどうかは分かりませんが、実は5年前位にここで行方不明者がでてるん

です。できればその人たちのリストとかも欲しいんですけど…西園寺さん、頼めますか？

そういう所には間違いなくそういったリストがあるんです」

「お、俺！？…はい、出来る限りのことならまあ手伝います」

なんの話がよく聞いてなかったが。

「そうですか。おっとそろそろここらへんでおろしておきましょう。それじゃ、

また後日そちらへ伺います」

「分かりました」

そう言つて、俺は車を降りた。

…何の話か分からないけど、まあここ最近の生徒のリストをもらえばいいんだな？

ま、それより今は、

「遊ぶぞー！ーっ！！」

寮に帰った後、たまたまゲットしたガンダーロボのフィギュアを荷田君にあげたら
めちゃくちゃ喜んでた。お礼に200ペラくれた。そんなにいいも

の
だ
っ
た
の
か
な
？

補足 1

（補足）

きつと原作とは違うかもしれないけど、そこはあしからず。

野球部関係

主人公：野球の腕はそこそこあるヤツ。ただ、高校に入ってからゲームをする人の手腕しだい。とにかく頭が悪い。高校生で因数分解が出来ない。

荷田君：野球部の中では頭がいい方。学年でみると平均的。メガネをかけていて、主人公とても仲がいい。あと忘れてはいけけないのが非常にマニア。

越後……野球部の中で一番バカ。学年でも一番バカ。どうやって入試に合格したかは謎。なぜか野球のルールは細かいとこまで覚えている。野球センスは素晴らしい。やれやれだぜ が口癖。

田島……顔が暗い。頭はいい。野球は上手い。…それくらいしか印象がないなあ。

岩田……いつも腹をすかせている、大きくて馬鹿なヤツ。食べ物をくれる人には誰にでもついていく。パワーがあるから野球では頼りになる。

官取……嘘つき。学力は普通。いかげん学力で判断するのやめようかな。嘘つきというか、ほら吹き。ただ、努力家ではあるので実力はある。ていうか一粒一万円の飴ってなんなんだよ…

北乃……先輩1。実家は相当金持ち。ゲーム中ではいろいろ邪魔してくる。布団には落書きするわ、缶を投げってくるわ…、とにかくうざい。

基宗……先輩2。主人公で色々実験してくる。ほんとやめてほしいぜ…

飯占……先輩3。元キャプテン。名前が「いいじめ」だからどんな性格かは解るはず。

補足2

補足2

第九話までの出てきたキャラまとめ。

主人公…補足1を読め

荷田…補足1を読め

越後…補足1（ry

岩田…（ry

田島、かんど（ry

先輩方（ry

大河内先生…30代後半くらいの熱血教師。主人公たちのことをよく見てくれる人気のある教師。主人公たちの担任でもある。

車坂監督…と同じくらいの年なのに、こっちは40後半に見えるルックス。老けてる。相当熱血。

母…主人公の母。…それ以外に説明欲しい？

桧垣先生…変な髪の水の形をした変人。全てを科学的にみる。恋も

科学的に調べた。他にもいろいろやったがまだ言うことができない。

大江 和那：槍が大好きで、ケンカしたら大の男3人くらいには勝てる。3年生には身長が伸びて、190になっちゃうよ。ちなみにパワポケ10以降の作品では普通の軍隊にに勝てるほど強くなっている。

神条 紫杏：頭も賢く、判断力もあるが、予想外の事態には弱い。このようなことから大物になるのだが：俺の作品ではどうなることやら。登場回数がふえたらいいね。しあーんで調べると結構件数がある。

高科 奈桜：スーパートラブルメーカー。自分でトラブルを作り、引き寄せる。常に落ち着きが無く、好奇心を携帯してる。緑色の髪だが、パワポケでは普通。結構俺の好きなキャラ。こいつの登場回数は増えるだろう。にしても名前読みづらいよね。最初何て読むかわからなかった。

食堂のおばちゃん：登場回数はたぶんこの作品では1回だけ。

天道：超高校生級の最強ピッチャー。最高球速Max162キロ。それ、日本最高記録じゃないの？監督は変化球は曲がない、とか言っても、3球種も投げれるから。そもそも打撃センスだけでもヤバイから。本名は天道^{テンドウ}翔馬^{ショウマ}。

の彼女：本名は御室^{みむろ}若菜^{わかな}。かなりの美形。今の所はこの説明だけでいいや。

第11話 「俺と悪夢の練習」

とりあえず、ミーナさんは生徒のリストがほしいって言ってたけど…
一体どうしたらいいか俺には見当がつかないな。
校長にでも頼んでみるか？まあ無理だろうけど。

「おい、西園寺。練習行こうぜ」

「ああ分かった。今行くよ」

またあとで考えるか。別に今じゃなくてもいいわけだし。

「あの…」

「ん、何だ？」

「またあの練習をやるんですか？」

「いや、やる内容は別だ」

また俺はキャプテンと一緒に練習をする羽目になっている。

……今度はちゃんと考えているよな？

「今回は他の学校の練習メニューを参考にしてみた」

「あ、それなら大丈夫ですね」

「ああ、ぬかりはない」

なんだ、まともそうじゃないか。

前言撤回。どうしてこうなった。

まず、手首におもりが入ったリストバンド。

足にタイヤをつけて手にいろいろ持たされている。

「それからうさぎ跳びでグラウンドを回るんだ」

「本気で言ってますか」

「あたりまえだろう」

本気で何考えてんだ。

「あの……これって本当に他の学校の奴を参考にしたんですよね？」

「ああ、もちろんだ。まあ一部はそのまま採用させてもらったがな全部だろ。これ絶対全部だろ。とりあえずやるしかないのかなあ……ってなんか音が聞こえないか？」

グルルルルル……

この森でよく聞くまるで警備犬のような声……

「あと、俺のアレンジも1つ加えさせてもらったぞ」

「ま、間違いなく先輩のアレンジってあれですよ？」

「さあ、知らない。それじゃ始めるぞ」

「え、ちょ、知らんって！それに始めるっていわれてもまだ準備が」

「もう犬が追いかけてきてるが？」

こ、こんなの

「無理だああああー！」

「あ、こら！ちゃんとうさぎ跳びで、持ってる物を離すな！」

むちゃを言っな！あ、もう犬がそこに……

「少しお前には厳しかったか」

「あんなの誰にでも無理ですよ」

「そうか？越後あたりなら普通にこなしそうだが」

俺と越後をいっしょにするな。

それに越後でも無理だろう。無論、頭腦的な意味で。

「それじゃあ、こっちの練習法も試しておくか」

「え、まだあつたんですか？」

（この人ホントに暇人なんだなあ…）

「キャプテン、西園寺君がキャプテンのことを暇人だと思ってるでやんす！」

「わあ、荷田君一体どこから来たんだ！」

「……荷田、それは本当か？」

「本当でやんす！オイラは西園寺君の考えてることが分かるんでやんす！」

「西園寺……」

「そんなことは考えてません！荷田君が勝手に言っってきたるだけです！」

思っではいたけどさ…そんなこと言えるわけないだろう。

「なら確かめるか。ここに × が書かれているカードがある。西園寺に引いてもらうから荷田は何を引いたか当ててくれ」

「分かりました！でやんす」

いや、さすがに荷田君でも無理だろ。しかもだんだん練習関係なくなってるし……

まあいいか、これを引いて……あれ？「？」？

（キャプテ

）（言っなよ？）

？て。なんかせくないか？こんなの分かるわけ…

「キャプテンもひどいでやんすね。ひいたのは？のカードでやんす！」

「ほう、俺がよく他のカードを渡したことに気づいたな」

「相手が西園寺君でやんすからね」

結果：俺の弱点〃荷田君。

「つまり西園寺は俺を暇人と思っていたわけだな？」

「うつ！そ、それはそうかもしれないですけど……そうだ！早く新しい練習を

試しましょう！」

「話を逸らしたな」

「話を逸らしたでやんすね」

グッ……

「それじゃあおいらは練習にもどるでやんす」

「ああ、しかつりやれよ。……西園寺」

「は、はいっ！」

「さっきの件は後で話そう。それじゃあ次の練習はこのイヤホンをつけてくれ。」

「これですか？」

得になんにも聞こえないぞ？いや、なにか聞こえて

（お前は野球が上手くなる）

（お前は野球がとても上手くなる）

な、なんだ？一体何なんだこれは？

（お前の周りはライバルだ！）

（お前は野球の練習がしたくなる！）

や、やばい。半分洗脳じゃないのかこれ！？

（お前は〜）

（お前は〜）

（お前は〜！）

（お前は〜！）

こ、これ以上はマズイ！

そう思っただけはイヤホンをはずした。

「あ、まだ終わっていないのにイヤホンをはずしてはダメだろ」

「これって洗脳じゃないですか！」

「何言ってる。これは俺が考えた練習法、催眠式の気合注入法だ」
「催眠式の時点でダメじゃないですか」

なんでこの人はこういうことしかできないんだろうか…

もつとまともな練習は考えれないのか？

「とりあえず今日はもう帰りますよ！疲れたし」

「ああ、練習はもう終わっていいぞ。練習はな」

「練習は？」

「そうだ。次はなぜお前が俺を暇人と思っていたかを小1時間聞く必要がある。」

「さあこい」

え、ちょっと……やっぱ怒られることになるのか……

薄暗い部屋の中、キャプテンと二人きりで話をした。とても怖かった。

第12話 「屋上での出来事」

「さてと。屋上に行ってみるか」

最近俺は屋上に行って身体を休めることが日課となっている。
なんてったって風が気持ちいいし……ん？

「また高科のやつ来てるのか」

どれ、ちょっと会いに行ってやるか。
別に暇だし。

「つて、あれ？」

アイツどこ行った？少し目を離れたすきに……

「誰かをお探ですか？」

「ああ。常にカメラとトラブルを携帯していて、落ち着きのない女の子を探して

いるんだ。しかも男子校舎で、だ」

「そんな人居るわけじゃないですか。少し熱でもあるんじゃないんですか？」

「目の前にいるだろっ！お前だお前！」

「私の場合は＋好奇心ですよ」

あ、トラブルを常に携帯してることは認めるのか。
にしても、こいつどうやってここに来たんだ？
さっきまで下にいたのものすごく速いな。

「ふっふっふ。ナオっちがここにこんなに速くきたことにびっくりしてるかもしれない」

「ませんが、ナオっちの隠密術をなめてはいけませんよ」

「なんでだ？」

「実は昔に出会ったプロの情報屋のお姉さんに教えてもらったのです。『ふふふ、筋

がいいわね、ナオ』と言われましたよ」

「だれだ、こいつにこんなややこしいのを教えたのは……」

「あ、あそこにそのお姉さんがいますよ！」

「ハア！？」

「あ、あの金髪でコートを着た人か？　つてか、そもそもなんで学校にいるんだ。不法侵入だろ。」

「あのお姉さんすごいんですよ。とってもケンカが強いんです。私の目の前で

暴走族を一人で倒してましたよ。素手で」

「それ、本当に人間か？……って、あれ？　さっきの人どこにいったんだ？」

「後ろにいるわよ」

「え？……」　と思いながら後ろを見たら

そこには金髪の人がいなかった。

あれ？さっきの声は高科……でもなく、俺の知り合いにもそんな声の奴はいない。

「私はれっきとした人間よ。素手で暴走族を倒したからって人外扱いしないで欲しいわね」

「だ、誰だ！？」

「だから、そのお姉さんですよ」

今度も後ろから声が聞こえてきた。
後ろを振り向くと

やっぱりいなかった。

「ど、どこにいるんだ？」

「だからそこにいるじゃないですか」

「ナオの言う通りよ。私はここにいるわ」

高科にはどこにいるか分かるらしい。

いや、ホントにどこ？

「しょうがないわね、そろそろ姿を見せてあげるわ」

そういつて、お姉さんと呼ばれる人物は俺の後ろからでてきた。

いやいや、その方向さつき俺が向いていた方向ですよ？

どっからでてきたんですか？

「単にあなたが振り向くと同時に反対側に移動しただけよ」

「だからそこにいるっていったじゃないですか。何を聞いてたんですか、西園寺君は？」

ああ、なるほどー……って、なるかあ！っていったら、隠密術って言われるのは

分かってるけど……

「にしても、この男はあの男と雰囲気が非常に似ているわね」

「あの男って……お姉さん彼氏いたんですか！？」

「違うわよ。確かに好きではあったけど、仕事の時の固定客だった男よ」

「その人となんで俺が雰囲気似てるんですか？えーと……」

「お姉さんでいいわよ」

「お、お姉さん？」

なんか呼びにくいな。それにこの人年齢いくつ……

ゴゴゴ……

「人の年齢を探るのはやめた方がいいわよ？」

「は、はいっ！」

「それで質問の答えなんだけど。そんなこと言われても私は分からないわ。」

ただ、野球をやっててバカっぽいところが似てるからかしら。」

「人をバカっぽいとは失礼な……」

まあ実際馬鹿だからしょうがないんだけど。

「まああなたはデータで見たところ相当馬鹿だったけどね」

「なぜ知ってる！？」

「ナオから聞いたでしょう。私は情報屋よ。いろんなことを知っているわ。」

じよ、情報屋ってこわいな。みんなこんななのか？

むしろこんなことができるなら政府のスパイでもやりゃあいいのに。

「それで、お姉さん？」

「なに、ナオ？」

「お姉さんはなんでここに来たんですか？」

「それはもちろん仕事よ。ここで調べて欲しいことがあるって言われたからね。」

「まあもう終わったけど」

「そうなんですか」

……そうだ！この人にミーナさんが言ってた情報を頼めばいいんじゃないか？

もしかしたらお金がかかるかもしれないけどさ。

「あ、お、お姉さ」

「お姉さんならもう行っちゃいましたよ？」

「え？」

撤退するのはやつ！

そ、そういえばここ屋上だよな？あの人どっから帰ったんだ？まさか、飛び降りた……とか。

「それにしても、なんで高科はここに来たんだ？」

「下から西園寺君が見えたので。それと……屋上からの景色からを見たかったので」

屋上？上からの眺めを見たかったってことか？

「それで、こっから見て分かったことがあります。この学園にはまだナオっちが知らない

ことがいっぱいあることが分かりました」

「そうか。でも……ここは男子校舎って事を忘れるなよ」

何度言っても入ってきそうだけどなあ。

先生たちもさぞ苦労してるだろう。

「そういえば、外に行ってるのはですね」

「まだ何も聞いてないぞ」

「あれ、聞くんじゃないんですか？」

……………そういつことにしとくか。

「まさか図星ですか？かわいいですね」

「う、うるさい」

「それですね、外に行ってるのはただ買い物に行ってるだけですよ」

「買い物？そんなの購買でいくらでもできるだろうに。」

「そこまで面倒なことをしてまで外に買い物に行くのか。」

「購買部にもいろいろあるけど、やっぱり外の方が品数は多いし、新商品とかもあるから。」

「それらを買ってきて、寮の皆にあげるんですよ。」

「こづかい稼ぎか？」

「違いますよ。寮の皆にあげたら、生活が華やかになりますから」「華やか？」

「はい。周りが楽しかったら自分も楽しくなるでしょ？だからあたしが楽しい空間を作り出してるだけですよ」

ふん。これで扉と鍵のことを聞いて、高科の理由も聞いたからだいたい全部

聞いたことになるかな。

キョロキョロ

「どうした？」

高科が周りを見回していたから聞いてみた。

「そろそろあの先生が来るころかと」

「大河内先生が来るのは決定事項なのか？」

「いや、いつもくるから」

まさかそんなわけ

テクテク……

きちゃったよ。しょうがない、高科と隠れるか。

「高科！こつちにこい！」

「えっ？」

ダキッ

（ちょ、ちよつと！？）

（静かにしてるよ。多分大河内先生もすぐどこかに行くと思うから）

テクテク……

（……………）

（にしても本当に来るんだなあ。）

テクテク……

「そろそろ行ったか？お前トラブルメーカーでトラブルを呼ぶ體質なのか？本当に迷惑なヤツ……ん？」
「……………」

どうしたんだ？

「おい、高科？」
「戻る」

え？

「はあ？ちょ、ちょっと？」
「戻ります、それでは」
「あ、ああ」

タタタタタ……

せっかく上手くのがれたのに帰るのかよ。なんなんだいったい……
けど、なんかビックリした顔してたけど、あれは一体？

第13話 「秋季大会終了後」

「おい、サード！打球をしっかりとりやがれ！」
「は、はいっ！」

現在、ノックをやっている。しかもとても強烈なやつだ。原因は監督がとってもとっても怒ってるからだ。じゃあなぜ監督が怒っているかを説明しよう。

時間は少し戻って秋季大会。

俺たちは一回戦を勝って、二回戦の試合の途中だった。俺たちは、という言葉を使ったが、やっぱり俺はベンチ外。

「くっそー、こんどこそ俺がベンチ入りしてやる」

「ハハハ、悪いな西園寺！また俺と田島がベンチ入りで」

「おい、ベンチうるさい！3年がいなくなっただからってたるみすぎだぞ」

「す、すみません監督」

「分かったならいい」

カキーン！カキーン！

「あ！あの野郎、俺が目を離れたすきに」

「あ、先輩がめった打ちにされてるでやんす！」

平面高校6 - 4 親切高校

「おい、格下に負けるとはどういうことだ……基宗！」

「はい！……油断、しました」

「お前らには本当に愛想が尽きた。ここで一発お前殴りたいが、俺の拳が痛いだけだ。」

だから今から全員ぶっ倒れるまで地獄のノックだ！」

こういつことである。

はあ……試合に出てない俺までなんでやらされるんだよ。
つと、余計なこと考えてたらエラーしちゃった。

「おい西園寺！なにぼーつとしてんだ！ノッカー、もっとあいつに
強いのを浴びせて
やれ！」

「は、はい！」

（こりゃ打つ方も大変だぞ……）

「あの試合に負けてからずいぶんと練習が厳しくなったでやんすね」
「仕方ないだろ、あんな負け方したんだから」
「そうでやんすかね？おいらにはただの八つ当たりに見えるでやん
す」

まあ半分くらいはそうかもしれないけど。
とりあえず先輩の洗濯物などを早く片付けないといけないので、ち
やっちゃと手を動かす。
すると越後が話しかけてきた。

「そつえば知ってるか？星英が秋季大会優勝決めたんだってよ」

「あれっもうそんな日だったのか？負けると一気に興味が無くなるな」

「越後も暇なんでやんすね」

「来年にそなえて情報収集だよ。全く、やれやれだぜ」

「そういえば夏の星英高校は準決勝で止まってたらしいな」

「そういえばそうでやすね。まあ負けたのは天道がリリースで出てくる前に点が」

取られたらしいからでやんすけど」

こんな話をしながら俺たちは洗濯を終え、寮に帰った。

自室に戻った俺は暇なので他の部屋に遊びに行ってみることにした。そういえば、俺って他の部屋の奴の所に遊びに行ったこと無いな……

とりあえず、越後の部屋に遊びに行くことにした。

「ん、どうした西園寺。俺に何か用か？」

「いや、ただ遊びに来ただけだよ」

「そうか。……ところでさ」

ん？いったい常に野球のことしか考えてないコイツに相談されるだ
と？

明日は岩でも降ってくるんじゃないか。

「お前変なこと考えてないか？」

「い、いや？別に考えてないけど」

「おかしいな、荷田から教えてもらった情報ではこういつ時によく
変な事を考えてる

って言ってたんだが……まあいいか、本題に入るぞ」

本題に入るのはいいが、荷田君。お前何教えてんだ。

「何か足が速くなる方法知らないか？」

「足？」

「ああ」

なんで急に足の速さ？コイツそんな足遅い方じゃないだろ。むしろ早かったはず……

「なんで急にそんなときくんだ？お前は十分速いだろ」

「いや、もっと速くなりたいんだよ」

「そうか。うーん……」

というかそんな方法があつたら俺が逆に知りたいな。
何か無いかな……あ、そうだ！

「お、何かひらめいたか？」

「ああ。これから語尾にシュツ！てつけてみたらどうだ？」

「どういうことだよ」

「なんか速そうじゃね？」

普通に考えたら全く意味分らないが。さすがの越後もこれは

「やれやれだぜ、シュツ！」

「はやっ！もうやり始めてる！」

言った通り越後は語尾にシュツ！てつけていた。
そんなので速くなるわけないだろ。

「なんか、足だけじゃなく全てが速くなった気がするぜ、シュツ！」
「気がするだけだろ……」

「そんなことないぜ！シュツ！ほら見て見ろ、シュツ！身体が軽いぜ、シュツ！」

シュツ！シュツ！ってうるさい。教えるんじゃないかった。

「ありがとう西園寺、シュツ！これでしばらく練習させてもらっぜ、シュツ！」

そんなので感謝されるとは、感謝の重要さが減った気がする。

「もういい……俺は帰るぞ」

「ああ、それじゃあな、シュツ！」

部屋から出た後も後ろからシュツ！って声が聞こえた。
あいつ、本当に馬鹿だな。

後日、ベースランニングのタイムをはかったのだが、越後は逆に遅くなっただけらしい。

なんかシュツ！っていった回数が少なかったからとか言ってた。

やっぱ馬鹿だろ……あいつ。

第14話 「森で迷った……どうしよう」

とりあえず俺は今、森を歩いている。

暇なので、大江にでも会いに行こうかと思ったのだ。
ところが、

「あれ？今日はいないみたいだな」

そう、いなかったのである。

「なんだ、今日はいないのか……」

しょうがないので、この付近を見渡してみる。

しかし、ここは地面が固く、周りの木の葉っぱがちぎり取られている。

そつえば前に大江が言ってたな。

ここで落ちてくる木の葉をつかみ取る……だったか？いや、握りつぶす？

まあそんなところだろう。そして、この硬い地面は強く踏んだ後だろつな。

すごい練習を重ねているのが良く解る。

「まあ、ここにいても得にすること無いし……もう行くか」

「ほう、一体どこに行くんだ？」

大江では無い声が響く。

この声……前にも一回聴いたぞ。確か、

「神条？」

「む？私は名乗った覚えがないのだが。カズと一緒にいた男子生徒」
まあ名乗ったところか姿も見せてなかったんだけどさ。
いや、もしかして見られていたのかな？

「なら一応名乗っとくよ。俺は」

「野球部のニコニコだろう？私は監督生だから生徒の名前は知っている。それに

しても、前に私は言わなかったか？もうここには来るなと」

う。そういえば言ってたな。けどそんなことは気にしない。

「私自身は別にいいんだが、ここは女子寮の近く。あまりここに来ることがあれば、少し反省してもらわなければな」

「は、反省？」

何を反省するって言うんだ？あ、テストとか？

「まあ仏の顔も三度までというからな。ここは見逃してやろつ。…にしても君も

不幸だな。私はあの日以来ここに来てなかったというのに、君とまた遭遇したからな」

「なにい、じゃあお前は毎回ここに来てるわけじゃないのか！？」

まじかい。俺もあの日以来、来てなかったんだが……

「本当だったらすでに規則違反で反省室に連れてかれてるぞ。ただ、お前とは
なにか古い縁を感じるな」

「なんじゃそりゃ」

古い縁って何だ。こんなヤツと縁があっても邪魔なだけだな。

「それじゃあ俺は帰るかな」

「まあ待て。一つ頼みがある」

「？」

一体なんだ？

この偉い監督さんが一般ピーポの俺に頼みごと？
しかも男子で全く関わったことのない俺に？

なんかとても嫌な予感がした。

「まあ、そんな悪い事じゃない。実はだな、最近女子生徒が男子校舎とかに忍び

込んでいるんだが……そいつを見つけたら捕まえといてくれ。ちなみに顔写真だ」

そう言われて渡された顔写真を見る。

予想はついてたが

（高科じゃねえかこれ！）

「どうした？コイツ知り合いだよって感じの顔して」

「ま、まさか。なんで俺が女生徒と知り合いなんだよ」

「それもそうだな。それで、そいつが最近男子校舎の方に行って、カメラで写真を

撮ったりとか、いろいろやる上に、なかなか捕まらないんだ」

そりゃそうだろうな。あんな情報屋から隠密術教えてもらっているんだもんな。

「ま、話はこれだけだ。悪かったな、手間を取らせて。もうこれ以上会うことが無い事を願っているよ」

こっちとしても、もう会いたくないよ。

そう願うのだった。

帰り道

……あれ？俺今どこにいるんだ？

今は夜である。

「ヤバイ、完璧に道に迷ってしまった。こっちはずっと海岸の方だけど、帰り道が分からない」

しょうがないから再び歩き出す。ああ、これは食事の時間に合わないか……
そんなとき、向こうから人の気配がした。

（誰か来た！？隠れないと……って間に合わない！）

ガサガサ

そこには、長い髪の毛で、とても知的そうな雰囲気の子がいた。この学校の制服を着ているってことは、この学校の生徒なんだろう。

「なぜ男子生徒がここに？立ち入り禁止のはずだが」

（うっ、やばいぞ）

「じ、実は帰り道が分からなくなってしまったんだ」

「帰り道？じゃあ、そもそもどこに行こうとしてたんだ？」

そりゃそつだ。ここから女子寮は……すぐそばみたいだし。
とりあえず、今日の話を話してみるか。

「……なんだか信じがたいな。まあ、確かに証拠品も持ってるから
ホント
のことだろうけど」

証拠品とは、神条からもらった高科の写真だ。
いや、なんで返さなかった俺？今はそのおかげで助かってるけどさ。

「そこに誰かいるんですの？」

この声は？

「そこの茂みに隠れて！」

この女の子に言われて、俺は茂みに隠れた。
そのとたん、先生が現れた。

「まあ、天月さん。またあなたでしたの」
「すみません。気分がすぐれないので、夜風にあたりたかったんです」

「規則は規則。あなたは成績が優秀なんだから、規則さえ守ればす

ぐにでも監督生
になれるのに」

「すみません」

「だいたいあなたはいつも」

くどくどくどくど……

がみがみがみがみ……

30分が経過した。

説教が長いな……早くどこかに行ってくれないかな？

「つと、こんな説教は後回しです。この森に不審者が紛れたような
ので、天月さん、

あなたも早く寮に戻りなさい」

「分かりました」

テクテク……

「もう出てきても大丈夫」

「ふう、助かったよ」

それにしてもなんで俺を助けてくれたんだ？

「俺だけ隠れてしまつてごめん」

「気にするな。私はいつものことだから。さつき先生が言っていた不審者とは君のことだろう？もし君が捕まっていたらとんでもない事になっていた」「た、たしかに……」

捕まっていたら野球部を退部することになっただろうな。そう考えるとここで助けてくれたのは、本当にありがたい。

「これに懲りたら、もう森の中に入るのはやめといた方がいい」「分かったよ」

「……それでは」
「あ、ちよつと待って！俺は西園寺。一年生だけど、君は？」

うん、助けてもらったのに、自己紹介をしないのは失礼だ。

「私は天月 あまつぎ 五十鈴 いすず。私も一年生。」

そしてお互いによろしく、と言いつつ。
……笑うとかわいいな。

「まあこの学校は男子と女子が別々になっているから、もう会うことはないかも知れないけど。それでは」

そういつて彼女は去って行った。

「それにしても、こんな時間に抜け出して、何してたんだろう？」「そう考えていたら、大変な事実気がついた。

俺、どうやって帰ろう。

ガサガサ

また草むらが！？

「あれ、こんな所で何しているんですか？」

「……お前こそ何しているんだ、高科」

トラブルメーカーがやってきた。なぜここに？

「質問に質問で返すのは良くないと思いますよ。まあいいですけど、私は単なる散歩

です」

「嘘だろ」

「よく分かりましたね」

こいつが散歩なんてほとんどなさそうだからな。

そもそも夜に散歩はないだろう。

「暇だから男子寮にでも忍び込もうと思ってたんですよ」

「なぜこんな夜に？」

「楽しそうだからですよ。ただそれだけです。まあ、もうめんどくさいので帰ろうと

思っていました。それで、西園寺君はなんでここに？」

「……道に迷った」

恥ずかしいが、しょうがないので言ってみる。

ついでに神条から渡された写真の事を言ってみると、

「まあ生徒会のほうから目をつけられてますからね」

と、言われた。

「しょうがないので校舎の方向だけ教えてあげますよ」

「それは信じていいんだよね？」

「さすがにこんな夜まで迷っている人に変な方向教えたりしませんよ」

それならいいんだが……どうも信用できない。

あ、そうだ。

「そういえば、お前なんであのとき帰ったんだ？」

「へ？いつ？」

「屋上で会ったときだよ」

すると、なぜか少し照れくさそうにしていた。

うん？俺、何かしたか？

「まあ気にしないで下さい。それより、方向はあっちですよ」
「あ、ああ」

はぐらかされてしまったが、今は帰る方が先なので、教えてもらった方向に行くことにする。

高科に教えてもらった方向に行くと、旧校舎についた。
……校舎は校舎でも、さすがにそれは違うだろう。
やっぱりあいつとは付き合わない方がいいかな？

第15話 「再度森へ」

さーてと。今度は大江いるかね？

前回と同じように俺は森を歩いていた。暇だから。

別に俺が女好きってわけではない。

ただ……

今度は迷子にならないようにしないとな。

「あの後、帰った時の時間が11時だったからなあ」

そのおかげで寮に入るのも一苦労、飯は食えないで大変だった。

俺が帰った時に荷田君が、お菓子を一緒に食べよう、と誘ってくれたのが

非常に心に染みた。

そう考えている間に、俺はいつもの場所まで着いた。

だが、また大江の姿は無かった。

「あれ？またいないのか……」

むう、アイツそんなに来ることがないのかな？

しょうがない、また不審者と思われる前に帰るとするか。

「……そうだ！」

考えたら俺は一度も女子寮を見たことが無いな。
一回くらい見ておくか。

いや、別に俺が女好きってわけじゃないよ？ほんとだよ？
さっきも言ったけど。

そうして少し歩くと、そこには校舎があった。
ただ、これ以上近づくとバレそうなので、それ以上は近づかない。

「……おお、これが女子寮か」

なんか不思議な気分になる。
何人かの女子生徒とはあったけど、本当にこの学校には女子生徒が
いるというのを
あらためて認識した。

そのとき。

「大江さん！あなたは どうして そうやってすぐに備品を壊してしま
うんですか？」

「はあ、えろうすんません」

「その言葉づかいもそう。もう少しちゃんと喋れないの？」

「はい、申し訳ありません！」

「……あなた、ふざけてるの？ガミガミガミガミ」

この声は、天月と会った時の先生と、大江の声だ。
なにか怒られているようだけど、ここからじゃ上手く聞きとられな

い。

もう少し近寄るか。

（はぁ、一体どないせえちゅうねん……おっ！？）

「せ、先生！」

「ガミガミ……はい？どうしました？大江さん」

「きゅ、急に腹が痛くなったんで……後で改めて怒られますんで、失礼します」

タタタタタ……

「あ、大江さん！？……本当にダメな子ですね」

ガサガサガサ……

ワンワン！（お、馬鹿な人間がいるぜ）

ワン！（おい、もう一人来るぞ）

ワ……ワン！（こ、この匂いは！）

キャ、キャン！（悪魔だ、悪魔が来るぞ、逃げろー！！）

ん？なんかあっちの方で犬が逃げてないか？
あ、大江がこっちに来た。

「やあ、西園寺君。今日はどうしたんや？」

「いや、暇だから話相手でも探してこっちに來ただけど、見当た
らなかつたから

こっちに來たんだ」

「……こっちは女子寮しかないはずやねんけど」

「う、誤解だ！」

確かに怪しまれるのも無理はない。

「はあ、にしても西園寺君、あんた危ないところやったなあ」

「何が？」

「こころへん、あたしの友達多いねんで？」

まさかさっきの犬は……

深く考えない方がいいな。

ワン……（誰が友達だよ、あんなに首を絞めつけてきたりするくせ
に）

ギロツ

キャ、キャン！（に、逃げる！）

「おい、大江。お前、今すごい睨んでなかつたか？」

「え、嫌やなあ。そんな目しとらんで？」

たぶんあつちで草がガサガサ言つてたから、俺以外の何かを睨んだ
んだろうけど。

今ここにいたら犬か警備員さん。

まさか警備員さんを睨んだりはしないから……犬しかないけど。

まさか人間以外にも睨んだりするのは効くのか？
ちよつと聞いてみるか。

「なあ、大江」

「ん、何？」

「お前がやってた槍つてさ、睨んだりするのも武器なのか？」

「だからー、睨んでないつてば。あたし、女の子やで？そんな人なんか睨まんて」

人？なら、動物に対しては睨むということか。

「つまり、犬に対してはするつてことだよな」

「確かに犬は人じゃないけど……分かった、降参や、降参！」

「なんだ、意外とあっさり認めるんだな」

「これ以上言つたつてどうせ無駄やろ？」

そりゃそうかもしれないが。

「で、それつて槍の練習の賜物なのか？」

「槍とはあんまり関係ないけど、要は気迫やな」

「気迫？」

それこそ女の子が使う言葉なのか？

にしても気迫つて……

「結局どうやるんだ？」

「なんや、あんた覚えたいのか。けど、教えられへんな」

「なんでだ？」

これくらい教えてくれたらいいのに。

別に減るものでもないだろう。
そう思いながら話を続ける。

「これは古武術の技やからな。教えてもらおう思たら、金とるで、金！」

「金なんて持つてる訳ないだろ」

ペラならあるが、残念ながら手持ちが少ない。

「そういう訳で、もし教えてほしかったらまた別の機会やな」

「あともう一つ。睨みつけるだけなのに、それも古武術の技なのか？」

「教えられへんなあ」

ケチだなあ。まあいいけど。

「他にも重い荷物を軽く持つとかいろいろあるけどな」

なんだそれ、本当に古武術なのか？

なんだか気になるけど……本人が教えるのは金いると言っているし、しょうがないな。

すると、向こうから人がやってきた。

「カズ、あんたこんなところにいたの。紫杏が呼んでるわよ、早く戻りましよ」

「ああ、分かった。すぐ戻るわ」

話し方的にたぶん同学年だろう。

眼鏡をかけていて、少し気が弱そうだけど。

「で、あんたの隣にいるコイツはだれ？」

前言撤回。コイツとか呼ばれる時点で、もう気が弱くないのが分かる。

むしろ、この感じはめっちゃくちゃ気が強いな。

「こいつは同じ学年の西園寺っちゅー奴や。よろしゅうしたってや」「ふーん。なんでここににいるわけ？しかも私、男子って嫌いなんだけど」

なぜか睨まれた。しかも、なんか酷い事言われてるし。

「ま、それじゃあ私先に行ってるから」

そう言っただけで彼女は校舎の方へ行っただけ。

「ま、まあ付き合いにくいかもしれないけどよろしゅうしたってや。あ、名前の方は浜野^{はまの} 朱里^{あかり}って言うから」

そして、大江は浜野の後をつけていった。

誰もいなくなっただけから、俺も帰るか。
これから練習あるしな。

第16話 「練習後」

「よし、次はカーブの投げ込みだ」

「はい！」

今は練習中である。さっきの会話を見て分かるように、俺は変化球重視の練習だ。

天道には速球では敵わないが、こっちは変化・技術で勝負と、言ったところか。

ちなみに、キャッチャーは荷田君がしてくれている。

「にしても、西園寺君のカーブは良く曲がるでやんすね」

「まあ俺の一番の武器だからな」

中二の頃からずっと練習してきた変化球だ。

なかなか打たれない自信はある。

「どうせなら、もっといい変化球にする気はないか？」

監督が言ってきた。

いい変化球だって？そりゃ良くしたいにきまつてるけど……

「どういうことですか？」

「例えば、そのカーブをスローカーブにしたりするんだ。お前にはそういう才能がある

から、出来ると思うんだが、どうする？」

うーん、スローカーブか……

「いや、やっぱりやめておきます」

怪我したら嫌だからな。

「なあ、西園寺。今日暇か？」

「なんだ越後？部活終わった後なら暇だけど、何か用か？」
「練習に付き合ってくれないか？」

練習か……そこそこ疲れてるけど、まあいいかな。
ということで、俺は越後と自主練することにした。

「110!……111!……112!」

俺たちは素振り続ける。
にしても越後、やっぱりフォームきれいだなあ。

「……199!……200!」
「よし、一回休憩するか」

さすがに練習後に連続で素振りをするのはきつい。
よく体力持つな。俺もまだまだ練習の必要があるな。

「どうだ、また俺と勝負しないか？」

越後から誘われた。

とはいっても、そんな俺の手持ちをポンポン見せたくはない。

「いや、今回はやめとくよ。疲れてるしな」

「そうか、なら俺が相手になってやるよ」

そういつて奥から現れたのは田島だった。

いつから見てたんだか……さっさと出てきたらよかったのに。

「まあ俺も練習で疲れてるから本気ではないけどな」

「別にいいぜ」

そういつて越後はバッターボックスへ、田島はマウンドの方へ歩く。

……

二人が対峙する。

個人的な意見ではあるが、俺は越後が勝つと思う。

確かに田島は制球力もあり、球種もある。が、越後は今日の素振りを
見ていると、

なかなか調子がよさそうだった。

ビュッ！

田島がボールを投げる。そのボールは越後のバットの先を掠めた。ガシャン！と、バックネットにボールがあたる。

（なんだ、田島も調子がよさそうだな。なら、この勝負、どっちが勝つか分らないな）

だが、案外早くその時が訪れた。
田島はカーブで内角低めを狙う。

「来た　！」

越後は狙ってたと言わんばかりに、いや、狙っていたんだろう。バットを勢いよくふり、そのバットは見事にボールを捉えた。

カキーン！

快音とともに、ボールは飛んでいく。

（……レフトオーバーって所か。）

勝因としては、素振りの前に越後から頼まれたカーブを打つ練習だろっな。

それがなければまだ分からなかった。

「ちえ、打たれちまったか」

「俺の勝ちだな！もちろん俺が勝ったからポテチくらいはおごってくれよ」

おい、それ前に俺が言ったセリフ。

「ぐ……まあいいだろう」

「さて、これからどうする？」

どうすると言われてもな……特にすることは無いんだが。
まあ暗くなってきたから寮に戻るとするかな。

「俺は戻るけど。二人はどうする？」

「俺は戻るぜ。田島は？」

「まだ残って自主練するよ」

ということで、俺と越後は寮に戻ることにした。

越後の部屋にて。

「なあ……越後。なんでお前って野球をやり始めたんだ？」

「俺か？」

いや、名前で呼んだし、ここにはお前しかいないから。

「やっぱり、野球は楽しいからかな」

笑って越後は答える。

そりゃそうか。じゃなけりゃ、越後も俺もここにはいないだろう。

「それに」

それに？それ以外に何かあるのか？

「他のスポーツはルールが理解しにくいだろ」

これは予想外の答えが来た。

お父さんが野球をやっていたとか、近くに野球が好きな人がいるとかなら分かるが、

「……なんじゃそりゃ」

「だって、サッカーとか意味が分からないか？」

しかもサッカーが分かりにくいと来たか。ラグビーとか普段やらないスポーツなら

ともかく、サッカーだ。

「手を使っちゃいけないのに、一部の奴は手を使っているし。そもそもなんでゴール

したら一点追加なんだ？」

「そこからかよ！」

大声を出してしまった。

けど、無理もないと思う。こんなやつ人生の中で初めて見たからな。

「じゃあなんで野球は理解できるんだ？振り逃げとかフィルダースチョイスとかを

理解するのに時間かかったんじゃないか？」

「何言ってるんだ西園寺。あんなの覚えるの簡単だろ？」

.....はあ？

ああ、そうか。

こいつ、本当に野球バカなんだ。

とりあえず越後の先輩が帰ってきたので俺は自分の部屋に戻った。

そろそろ寒くなってきたな。もう秋も終わって冬休みが始まるのか。

……
時間が過ぎるのが早く感じるな。

第17話 「ポテチは20ペラですよ」

「朝でやんす！起きるでやんすよ！」

そんな声を聞き、俺は身体をゆっくりと起こす。
どうせならここで美少女が起こしてくれたらいいのに……まあそんなことはないけどね。

「ん……荷田君、もう朝？」

「だから、朝でやんす、って言ったはずでやんすけど」

あ、そりゃそうだ。

今日は日曜日だけど、これから部活があるのか。

そして俺は二段ベットから出て、ユニフォームに着替える。
そのまま荷田君と一緒に食堂の方へ移動する。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

途中で出会ったチームメイトに挨拶を交わしながら、俺と荷田君は席に座る。

「西園寺君は人参が嫌いなんでやんすか？」

「そうだけど、なんで？」

「いつも最初の方にそれだけ食べてるからでやんす」

なるほど。俺は最初に嫌いなものを食べる癖があったのか。

自分でも気付かなかったなあ……どうでもいいけど。

「なら、荷田君はマツシユルーム嫌いなのか？最初に食べてるけど」
「オイラは先に好きなものを食べるんでやんす」

……どうでもいいか。

「ま、俺は先に部屋に戻るよ」

「待ってくれでやんす！今食べ終わるから、でやんす！」

「準備できた？」

「オツケーでやんす！」

寮で自分のグラブとかを持っていく最中である。

うーん、そろそろグラブがボロボロになってきたな。

新しいのに買い替えたいけど……600ペラかかるし。

「はあ、今日の練習かったりいなあ」

「どうしたんです？北乃先輩」

……嫌な予感がする。実は先日、こんなことがあった。

それは寮の付近を歩いていたらときである。

「はあ、練習かったりいなあ」

「だから、といって練習をさぼっちゃ監督に怒られるでやんすよ」
「俺は大丈夫なんだよ」

何が大丈夫なんだろう？

まあいいや、さっさとグラウンドに向かうか。

「うつ！いてててて！」

「ど、どうしたんですか？」

「急に膝が痛みだしてきたよ！これじゃ今日の練習は無理だ！」

はあ？

そんなはずないだろ。単に休みたいだけだろう……

「ちょ、ちょっと。北乃先輩、さすがにさぼっちゃだめですよ」

「ああ？ならこの状態で練習に行けって言うのか？」

「い、いや……」

んな無茶苦茶な。

だから野球が下手なんじゃ……ゲフンゲフン。

荷田君がいるところでこれは危ないな。

「それじゃ、監督に今日休むって言っといてくれ」

え、と二人で不満を言うが、もちろん先輩には通用しない。

「わ、分かりました……」

「ちゃんと帰りにはポテチ買ってこいよ」

こんなことがあったのだ。

さっきの言葉が、「部活めんどくさい」という意味なので、たぶん今回も同じだろう。

荷田君を見て見ると、困った顔をしていた。

（どうにかならない？）

（無理でやんすね）

そしてあの言葉が出る。

「うっ！いててて！」

「……どうしたんですか？」

「なんだよお前、先輩が痛みを訴えてるんだから、もう少しないのかよ」

本当に痛みがあるのなら、もっとそういう顔をしてくれ。
それに、そんな事を言わないだろう。

俺は心底めんどくさいながらも、先輩の話を聞くことにした。

「……まあいい。俺は急性胃腸炎にかかったので練習には行けない」
「まあそんなところでしょうけど」

バキ！

殴られた。お、親にも殴られた事無いのに！

……嘘です。もう先輩にも何回殴られた事か。
まあそれはおいとして、

「俺はテーマパークに行くことにするよ。可愛いキャラクター
ーたちと一緒に
遊んでくるぜ。それじゃあ監督に言つといてくれよ」

はあ……どうせ俺らが監督に怒られるんだろうな。
いいかげんにしてほしいよ。

「分かったでやんす。けど、お金はあるんでやんすか？」

確かに。お金は全部取り上げられてるはずだし、そもそもこの時間、
バスは無いはず。

どうやって行くんだろう？

ま、まさか、かの呪文ーラ……

「俺は特別な携帯を持ってるからな。そこらへんは別にどうにでもなるんだよ」

なんだ、ルー じゃないのか。期待したのに。

（西園寺君）

（なんだ、荷田君？）

（それは無いでやんす。ゲームのやり過ぎでやんす）

（……………）

突っ込まれた。

「それじゃ、俺は行ってくるぜ」

「あ、はい」

そう言っって先輩は携帯で誰かと話し始めた。
おっと、練習の時間が始まるな。急がないと。

「……ということで、北乃先輩が休むそうです」
「分かった」

さっきの先輩のことを言うと、監督は考え込み始めた。

（北乃の奴、俺をなめてるな？）

「それじゃあ俺たちは練習に戻ります」
「待て」

監督に止められた。

ああ……やっぱりこうなるのか。
だいたい分かってはいたけど。

「北乃の代わりの練習をお前らがやれ。まずはランニング10周！」

「はい……」

「声が小さい！」

「はい！」

トホホ……と俺たち二人はグラウンドを走る羽目になった。

後日、北乃先輩が監督に怒っていた。

……あれ？大丈夫なんじゃなかったのかな？
けど、なんかいい気味だ。

（そうでやんすね！）

荷田君に突っ込むのはもうやめよう。

第18話 「掃除」

「あはは、それでさあ」

「え、そうなんでやんすか!？」

俺と荷田君は、二人で会話しながら部室へ向かう。
この会話は単なる世間話です。

ガチャ

部室の扉をあけると、そこにはとんでもない臭いが漂っていた。
とりあえず、とてもくさい臭いだ。

「な、なんでやんすか!？この臭いは」

「一体どこから!？」

おそろおそろ近づいてみる。

だが、どこにその原因があるかは全く分からない。
一体どこに……？

「お、何やってんだ西園寺 うっ!？」

「どうした、越後、ってこの臭いは？」

越後と田島がやってきた。後ろを見ると官取と岩田もいる。
とりあえずこの4人は異変に気づいたようだ。

「お、おい西園寺。一体これはどういうことだ?」

田島が聞いてきた。

と、言われてもねえ。

「俺もよく知らないんだけど、今部室に入ったらこんな臭いが漂ってたんだよ」

「そうか…… 2週間程前から変な臭いがしてたのは知ってたが、急にこんな強くなるとはな」

気づいてんなら捨ててくれよ……

そう言いたかったが、とりあえず抑えることにした。

とりあえず今はこの問題を片づけることが先だからな。

「とりあえずこの臭いの原因に心当たりのある奴いないのか？」

「それが分かったら苦労しないでやんすよ……」

あ、そりゃそうか。

ならもう、これは我慢して探すしかないな。

「ま、それじゃあ他の人が来る前にやるか」

「やれやれだぜ」

「腹減った」

ということ、俺たちは掃除をすることになった。

ちなみに、2人目の言葉は越後、3人目は岩田である。

「おい、これなんだ？」

その越後の声に全員が振り向く。

しかし、越後が持つてる物は臭いの原因ではなかった。
だが、それは俺らが全く見たことのないものだった。

「越後、それなんだ？」

聞いてみる。

「だから俺が聞いてるんだって。なあ田島これなんだ？」

「俺がこの中で一番学力高そうだから判断したんだろ？が、俺もしらないぜ」

ちなみに、その越後が持つてゐるものとはピンク色の花だった。
チューリップとかではなく、俺たちが知ってる物ではなかった。
けど、見た感じ毒がありそうでもなかった。

「ああ……腹減った。それ食べてもいいかな？」

「いや、危ない、危ないから。こんな所にある花だぞ」

「そうか……なら頂きます」

そっいつて岩田はこの謎の花？草？を食べ始めた。

「ちょ！危ないって！」

毒でも入ってたかどうか。入ってなさそうだけど。

ムシャムシャ……

「味の方はどうでやんすか？」

「うん、なかなかいける。力がついた感じ」

「へえ、それはいいな」

「ここにもう一個あるから、官取もいつとくでやんすか？」

「いや、俺はいいよ……」

まだあったのか。それより早くお前ら探せよ……

「うん？おい、ここのロッカーから変な臭いがしないか？」

そう言っただけ田島が指したロッカーからは確かに変な臭いがした。これはビンゴか？

「た、たしかにこれはやれやれだぜ……」

「この中には何があるんでやんすかね？」

それじゃ開けるぞ、という田島の声でそのロッカーは開いた。それと同時にものすごい悪臭がロッカーから出てきた。

「こ、これはすごい臭いだ！」

「早く誰かこの原因の物体を外に出せ！」

上から岩田、官取だ。

とりあえずこの物体はなんなのか確認してみる。

「こ、これは……シャツ？」

「あ、汗だ……汗を吸ったアンダーシャツが発酵してものすごい臭いを出してるんだ」

とりあえず名前でも書いてないか……あれ？このタグの所に名前があるぞ？

えっと……に、だ？

「これ荷田君のじゃないか！」

「オ、オイラのシャツでやんすか！？あ、そういえば前にシャツが一枚無くなってたでやんす！」

お前のだったのか……

「とりあえず早くこれ処分しろよ」

「嫌でやんす！こうなったらもうこれはオイラのじゃないでやんす！」

「何言ってるんだ君は！？」

意味のわからない理屈だな！？子供でももつちヨイまともな事言うぞ。

「いいから捨てろよ」

「しょうがないでやんすねえ、捨ててやるでやんす」

「ああ、有難う……ってこれはもともと荷田君のдар！」

「それじゃ行ってくるでやんすよ」

そう言つて荷田君は外へ行つた。

たぶん焼却炉にでも行つたのだらう……これで一件落着、あれ？まだ

臭いが……？

「お、おい。まだ何か臭いが残ってないか？」

「越後、お前もか。気のせいだよな？」

越後と田島もまだ臭いを感じるらしい。

ま、まだあるのか！？

「あ……もしかして」

「なにか心当たりがあるのか？岩田」

そう言っただけ岩田は一つのロッカーに手を伸ばした。
そのロッカーが開くと

「うわ、臭っ！！」

岩田以外の全員が一步後ろへ引いた。

い、一体これは？

「俺が昔おなか空いた時の為にとって置いたおにぎりだ。前探して無かったけど、

こんなところにあつたのか」

そこには真っ黒になっているおにぎりがあった。
きつともものすごくカビが繁殖しているんだろう。

「い、岩田。いいから早くそれを捨ててくれ！」

「分かった」

越後の頼みにより、岩田は窓のほうに歩いて行った。

……窓？窓って扉の反対側だよ？どこにいくの？

「それっ」

ヒューン……

掛け声とともに岩田のおにぎりは放物線を描いていった。
臭いが一気に和らぐ。

「おにぎりが糸を引いていてきれいだったね」
「全然きれいじゃないから」

ハア……とても疲れた。さっさと寮に戻るか。

後日。またこんな事が無いように自分のロッカーを掃除していると、
パワビタDとペラが見つかった。超嬉しかった。

第18話 「掃除」(後書き)

パワビタD[®]ドリンクです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9481x/>

俺と野球と奇跡 （パワポケ10）

2011年11月4日17時21分発行